に売れている養老猛司先生の『バカの壁』(新潮新書)をお読みになりましたか？なかなか含蓄に富んだ本ですが、私なりに理解した所では、人間はみな自分の周りに「馬鹿の壁」を張りめぐらせて、他人と自分とを遮断しているのです。その場合ゆめゆめ自分が馬鹿だと思うのではなくて、回りの人をみな馬鹿だと思っているのです。みんな外界の情報を入力して自分の能力で適当に咀嚼して、自分の知識として外界へ出力して行きます。問題はその時々自分に不都合な情報は耳で聞き眼で見ても、本当には全く受け入れていないというのです。つまり自分に都合のよい情報のみを仕入れて、それでもって自分の人格を形成して行くというのです。おもしろい例話が挙げてありました。ある大学の薬学部で、男性女性まじえて、赤ちゃんのお産のビデオを見せたのです。そのあと感想文を書かせたら女子薬学生はみんな〝よいものを見せてもらった、大いに参考になった〟と肯定的反応であったのに対して、男子学生はみんな〝こんなこと位はとうに知っている。見なくてもよかった〟と全く拒否反応だったというのです。女子学生にとって見ればお産は自分の問題ですから、肯定的に入力したのに対して、男子学生は〝お産なんて関係ない〟と思っていますから、入力が入力になっていないというのです。全くその通りだと思います。今度の大戦でアメリカは徹底的に日本を研究したのに対して、日本は都合のよい情報のみにすがって結局まけてしまったというのです。アメリカでは戦争中の日本語の研究が盛んになされたのに、日本では英語は敵性外国語だというので使用を禁止されるという状態で当時中学生であった筆者にも心にがい思い出があります。

養老先生は「人間話せばわかる」というけれども、それはウソなので、自己中心的な馬鹿の壁の中に閉じこもっている人が多いから、なかなか話しても分からないのである、と仰言います。

1月1日長ノ木本坊修正会ご流盃の様子

私たちは馬鹿の壁を突き破り、もっと広い世界に開かれてゆきたいものですが、今度のイラク戦争では、日本は馬鹿の壁をちゃんと突き破っているのでしょうか？

「知らざるを知らずとなす、これ知れるなり」と孔子さまも仰言います。「知っていることと知らないこと峻別し、知らないことを知らないと思えること、そのように分かることが本当の意味で知ってゆくことだ」というのです。このように広い知の世界を開いてゆくことと偽らざる自己の真実の姿と向き合うこととは深い関係にあるのです。

法然さまは「浄土宗(浄土の教え)は愚者になりて往生す」とお示しくださっています。それは、愚者である私が賢者になって往生するということではなく、愚者が愚者のまま往生するという意味でもありません。いつも賢者である私が愚者になってゆくところに、人間が人間の愚かさを超えて行く道、馬鹿の壁を突き破る道をお示し下さっているのです。換言すると、自他ともに生命を踏みつけ、損ないながら生活をしている私の姿に気づくということであります。私の馬鹿の壁の一部が壊れ、踏みつけられた生命の声なき声が聞こえはじめて他者の存在に私が気がつくということと、私の虚偽で固めた姿、偽らざる真実の姿が見えてくることとは別ではありません。

聞こえてきた世界からは「アメリカへつくかつかないか」の単純思考ではない、別な生き方が見えている筈です。しかし不幸なことに賢者ほど馬鹿の壁はぶ厚いのです。